

英米文化学会会報

第15号

NEWSLETTER

MAY ISSUE



英米文化学会第82回例会開催のお知らせ

開催日時：平成5年6月19日（土）午後3時～6時
 場所：日本大学歯学部3号館第7講堂（3階） お茶の水ニコライ堂隣
 研究発表（3：00～5：00）

- | | |
|---|--|
| 1. D. H. ロレンスの文体
——長編小説を中心に—— | 発表者：須田 理恵（日本大学）
司会：相良 英明（鶴見大学） |
| 2. Anzia Yeziarska: <i>Bread Givers</i> 論
「選ばれる」から「選ぶ」へ
——ユダヤ女性にとってのアメリカと抵抗—— | 発表者：君塚 淳一（中国短期大学）
司会：穴戸 絵里香（文京女子短期大学） |

分科会活動状況報告（5：00～5：20）
 会計報告等（5：20～5：40）
 懇親会（6：00～8：00）
 場所：「モーツァルト」第2龍名館ビル裏
 会費：4,000円

英米文化学会第11回大会開催のお知らせ

標記の大会を下記の要領にて開催します。会員の皆様万障お繰り合わせの上ご出席下さい。

記

開催日時：平成5年9月18日（土） 9時～17時30分
 会場：上智大学紀尾井坂ビル1F（JR・地下鉄丸の内線四谷駅下車徒歩8分）
 受付開始：9：00
 挨拶：9：30～9：40 英米文化学会会長 名和 雄次郎（拓殖大学教授）
 研究発表：9：40～15：20

1. 短期大学における英語科教育法の考察	小林 多佳子（昭和女子短大）
2. フランク・ノリスと世紀末のサンフランシスコ	有馬 健一（國學院大）
3. あとは、沈黙 —— <i>Measure for Measure</i> の終幕——	門野 泉（清泉女子大）
4. ピンチョンとアメリカン・サブライム	樋口 日出雄（梅光女学院短大）
5. ビデオを用いた授業の試み ——第4分科会共同研究報告——	亀山 孝（共愛学園高校） 高橋 祐子（文教大学女子短大） 藤田 牧子（神奈川県立上鶴間高校）

講演（15：30～17：00）

演題：英語辞書の今日的問題点 小島 義郎（早稲田大学教授）

会費：一般500円 学生300円

大会事務局：〒101 千代田区神田小川町3-20-4 第2龍名館ビル5F

日本大学歯学部 佐藤研究室 電話 03-3219-8160（直）

本号の主な内容

6月例会のお知らせ・・・P. 1
 9月大会のお知らせ・・・P. 1
 事務局からのお知らせ・・・PP. 5-6

故八村伸一先生追悼文・・・PP. 4-5
 新会長ご挨拶・・・PP. 2-3
 前会長ご挨拶・・・P. 3
 前副会長ご挨拶・・・P. 4

学会口座番号変更のお知らせ・・・P. 8

第82回例会研究発表レジメ

1. D. H. ロレンスの文体

須田 理恵

――長編小説を中心に――

ロレンスの『息子と恋人』は伝統的リアリズムの手法で描かれている。だが『息子と恋人』以降の小説である、『虹』や『恋する女』ではそれまでのとは異なった文体が用いられている。ちょうど、ヴァージニア・ウルフが『ダロウェイ夫人』や『ジェイコブの部屋』で、それまでのジェイン・オースティン風的手法から離れて「現実とは何か」、あるいは、「人間とは何か」というリアルな問いを新たな手法で表現することを切望し、実験的な手法を用いたように、ロレンスも新たな思考を新たな手法で表現することが必要であった。

小説の中では現在分詞の頻繁な使用や、接続詞を省いて極端に単純化された文章がその実例としてあげられる。そのような表現がいかに関ロレンスの文学に影響し、深めていったかをここで、考察してみたい。

2. Anzia Yezierska : *Bread Givers* 論

君塚 淳一

「選ばれる」から「選ぶ」へ

――ユダヤ系女性にとってのアメリカと抵抗――

旧世界における男性中心のユダヤ人社会の因習をそのままアメリカにおいても実践し続ける父親と、それにわざるを得ない母親。そして一家の稼ぎ頭 (*Bread Givers*) として散々働かされた拳句、父親に決められた相手と結婚させられ、嫁ぎ先でもまた貧窮して、*Bread Givers* の役を強いられる3人の姉たち。この両親、姉たちの姿を目の当りにし、『自分の人生は自らの手で』と決意して家を飛び出し、自分の生き方を見つける四女 Sara。

今回の発表ではこのSaraの＜アメリカ的女性像＞を「選ばれる」と「選ぶ」という「ユダヤ難民思想」の観点より分析し、更に先行論文では無視されがちであった「母親」「姉」、そして作品を通して語られる作家のユダヤ教に対する宗教観にも焦点を置くことにする。また、同時代のユダヤ系作家の作品や社会にも触れながらユダヤ系女性のアメリカでの抵抗を浮き彫りに論じてみたい。

新会長ご挨拶

雑学事始

――会長就任の挨拶にかえて――

名和 雄次郎

この3年ばかり高校用の検定教科書の編集に携ってきた。編集方針を討議している中で、難易程度や構成、各課のフォーマットなどは定まってくるが、問題は教材である。高校生の知的好奇心、多様な興味関心などを考え合わせ、できるだけ広い分野から収集し、ヴァリエティに富んだ内容にしたい。だが、高校生の目線で材料をさがすとすると、私のようなロートルにとっては至難の業である。しかし、そうも言っていない。時間を作っては図書館の書棚をあさる。休日には都心の洋書店へ足を運ぶ。*Playboy* や *Penthouse* に向きがちな視線をこらしめて *Seventeen* や *National Geographic* のページをめくる。

こうして見つけた材料の1つに、Grandma Mosesの絵と伝記があった。幸いにも、新宿の安田火災海上ビル内の美術館に80歳の農民画家モーゼスおばあさんの絵が6点展示されている。気に入った絵の解説と簡単な伝記を易しい英文にすることができて喜んだのも束の間、出揃った中学校用の新教科書の中に、なんとI～III巻ともモーゼスおばあさんの絵を表紙にした教科書があるではないか。これでは二番煎じを免れないので、残念にも没。

雪国生れの私は雪が大好きだ。ぜひ雪に関する1課を設けたい。世界で初めて雪の結晶の写真撮影に成功したのは、ヴァーモントの農夫Bentleyである。彼の写真集 *Snow Crystals* (McGraw-Hill, 1931) を見て人工雪を思いついたのが中谷宇吉郎。博士は1936年みことな雪の結晶を作り出すことに成功して、世界中の氷雪学者を驚かせた。この2人を結びつけた英文を書き、雪の結晶の写真で飾りたいと思った。だが、編集会議で、四国や九州地方の高校生にはどうだろうか、という疑問が出されて、これも没。

これらはほんの一部の例で、教科書作りは全く骨が折れる。時間もかかる。それでも、本や雑誌ばかりでな

く、ポップスを聞いたり、ビデオを見たりして教材をさがしている間に、ふと、あることに気がついた。最近の俺は精神的に高揚しているらしい。すべてにエネルギーに動き回っている自分が感じられる。これは専門外の雑学を始めたからではないか。半ば義務的に読む専門書と違って、他の分野の読書は実に楽しい。不得意な自然科学系統の本もどんどん読める。新聞などもせっせと切り抜いている。おかげで、教室の脱線話しのネタに事欠くこともない。自分が感動したあまり、英語の授業なのに、『大雪山・花紀行』(NHKビデオ)を見せたり、授業計画にはなかった*Roman Holiday*を見せながら英会話の授業に振り替えたりもした。私の熱気におおられ、学生たちもこの時は真剣だった。これはみな私の雑学の副産物にほかならない。

我らが英米文化学会には焦点がない、などとは言わずまい。専門バカの視野狭窄症患者もなく、お互いに刺激し合い、視野を広め合っているのだから。焦点などは、各自が各自の焦点を定めればよい。その意味で、英米文化学会の存在意義は、水面下に沈んでいる氷山のように大きいのだ、と、雑学の効用を改めて認識した私はひそかに自負している。

前会長ご挨拶

会長を退くに際しての弁

勝浦 吉雄

現代英米研究会から英米文化学会への歩みの沿革については会誌『現代英米文化』(14、20号)の巻頭に記した通りなので、それをご覧いただくことにして、私が会長を引き受けた経緯について簡単に振り返ってみたい。

当時(昭和57年)、会長の大島先生は本務校(専修大学)の英文学科長から文学部長に就任され、大層繁忙なので会長を退かれ、代りに私を指名された。もとより私は、会長の器でもなければ、勉強熱心でもないのに、会長をお引き受けしても会のレベルアップは望めそうもなく、それでも何とかしたいと思い、事務局長の名和先生と相談して副会長をお願いしてもらうことにした。これは今までなかったポストであるが、近々研究会を学会にしたいと思ったからである。副会長には深井先生と森川先生(残念ながらご都合により途中で退会された)をお願いしたところ、両先生とも快くお引き受けくださった。そして翌58年の秋、市ヶ谷の日本大学会館で目出たく学会の旗揚げをしたのだった。

爾来十年余、両先生は心許ない会長を誠心誠意補佐して下さり、会の杖とも柱ともなってお尽力された。感謝のほかはない。その間に名和事務局長は会の台所を潤すアイデアを提供され、中学・高校用の*Step by Step*(1~3)を桐原書店から出版することになり会も大分潤うようになった。これがやや下火になると*Word Bank 1300*を企画され、やはり桐原書店から出版して、現在これで会が潤っていることは会員の皆さんご存じのことと思う。

かつてわずか数名でスタートした研究会が学会と改称したときは60数名になり、そして四半世紀後の今日では百数十名を擁するまでになった。会員が増えたからといって必ずしも手放して喜べないが、これから新会長の名和先生、高取、小野両副会長、さらに各部門に有能な理事を擁して内容充実に向けて努力して頂きたい。

最初ほんの1~2年のつもりで引き受けたのに諸般の事情により十年余の長い間、会長の座を穢すことになり、その間、会の向上発展にご尽力頂いた会員諸兄姉に心からお礼申し上げるとともに、今後、会の一層の発展を祈念して「会長を退く」の辞としたい。長い間どうもありがとうございました(深謝)。(1993年3月31日)

★ 編集室より

今回から会報の体裁を変えてみました。誌面に関するご意見等がございましたら編集委員会までお寄せください。次号は8月下旬発行の予定です。

前副会長ご挨拶

あの頃

深井 宏一

小遣い銭にもことかいていた私が、その日は一万円札を数枚ふところに入れていました。この会の前身である「現代英米研究会」に初めて出席を許された日のことです。「研究会のあとで、いつも夕食をしますから、よかったですら御一緒に」と言われていたのですが、私にはえらい学者さん達がどんな料亭で食事をされるのか見当がつかなかったのです。

会が終わりました。学者さん達は、大通りから裏通りの路地へ、そしてなんとラーメン屋の二階にくりこんで、ギョーザでワンカップを飲み出したのです。

「実力があっても世に認められていない人が居るんだよ」「自分なりに勉強していても世の中にそれが通用するかどうか不安な人もいるんだよ」「そういうコツコツ勉強している人達が集まるのがこの研究会なんだ」これが初代会長大島良行氏のことばでした。

“Pause”とは何か?“Style”とは何だ?“話しことばと書きことば”はどう違うのか?そんなことを考えている英語の教員がいたら、誰だって笑うでしょう。ところが私がそんなことを言い出しても、当時の会員諸氏はまず忍耐強い人達でした。それを納得しないと次に進めない奴が一人位いてもいいと思ってくれたのかも知れません。

だれもかれも多少なりまだ戦争や戦後を引きずっていましたから、そのために自分の発表に欠けている所があるとの思いはあったにせよ、聞く側には発表のための発表はききたくないといった気持ちもありました。ですから発表する方にも聞く方にも、気取りもテライもオモネリもありませんでした。それらをひけらかす程の人数も居なかったのです。

発表者が書櫃の前に座る。そのすぐ前に何人かのきき手が折りたたみの椅子を寄せ合って座る。私などは戸棚のかけから時々首を伸ばして発表者の表情をうかがう。暖房もない日本大学歯学部の旧館の研究室の十二月の例会でした。

きょう、名和新会長と新役員諸氏の名簿が送られてきました。何度も何度も見ていまして、もっと早くこの体制がとれてもよかったのにと同時に、今回、会長職を退かれる勝浦吉雄先生がよくまあこのような立派な人材を育てて来られたものだとも思います。ひょっとすると、数年も前から毎年のように辞意を表明されたその度毎に、この新役員の方達の心の中に、次期を担う気持が醸造されてきた成果なのかも知れないとも思うのです。

【故八村伸一先生追悼文】

八村伸一先生の逝去を悼む

名和 雄次郎

1984年8月25日、本学会の第2回大会が、徳島文理大学香川校舎で開催された。初めての地方開催であった。その会場校を引き受け、高松市内のホテルまで手配してくださったのが、八村伸一先生であった。

当時会員50数名の本学会が、初めて試みる地方大会とあって、どこで大会を開くかという問題は、事務局をあずかる私にとっては、頭の痛い大きな難題であった。いろいろ思い巡らせた末、玉野商業高校から徳島文理大にかわられたばかりの八村先生に思い切って相談を持ちかけたのだった。大会前日、屋島に近い志度町の真新しいキャンパスを案内してくれたり、大会では、「英語教育ホンネとタテマエ」のシンポジストとして、英語教師の望ましき条件を朗朗と述べられた先生の姿が、今でも鮮明に浮んでくる。

八村先生との個人的な面識は、共に商業高校の教員ということで始まったのだった。都立第二商業高校に勤めていた私は、中村英語教育賞や全英連の論文募集にたびたび応募していたのだが、そのたびごとに、私のものなどよりはるかに優れた八村先生の論文に出会うのだった。また、先生は、全国商業高等学校協会の英語検定の作問委員をやっていた私に、問題点を的確に指摘してくれる語法の大家でもあった。八村先生は英語の語法、私は英語教育法と専攻するところは違っていたが、商業高校から大学へという同じコースをたどった同士で、共に良

きライバル意識を感じていた仲だった。大学に移られた八村先生は、間もなく英国へ留学されて研鑽を積み重ねたり、『シーニアス英和辞典』の編集をなされたりの大活躍ぶりです。私はただ先生の前に脱帽するばかりであった。

昨年の広島大会も、当初は先生の最後の勤務校である神戸女子大学で開催するはずだったのだが、その後、先生の健康がすぐれないということで、広島に変更されたのだった。「三の宮からも近いし、とても美しい所ですから、ぜひいらしてください」と言っておられたのだが、ご尊顔に接することができず、残念でならない。今はただ、先生のご冥福を心からお祈り申し上げるばかりである。

八村伸一先生を悼む

勝浦 吉雄

わが学会の有力会員の一人である八村先生の訃音に接し、只々驚くばかりである。八村先生には第二回大会（於徳島文理大学、昭和59年）で大変お世話になった。その後、例会にお姿を見せることはなかったが、研究に教育に大層精力的に活躍されているのを仄聞するにつけ、将来を大いに楽しみにしていた。そのような先生を失ったことは惜しみても余りあるが、この上は会員諸兄姉とともに、ひたすら先生のご冥福を祈り哀悼の辞にかえさせて頂く（合掌）。

事務局からのお知らせ

1. BBS（電子掲示板システム）のお知らせ

学会情報・学術情報・その他を利用する為のエニグマBBS (Bulletin Board System) が利用可能となりました。主な内容は下記の通りです。

- ・学会情報＝会員の発表記録、学会誌の目次集、会員住所録、例会・大会情報・分科会報告など
- ・学術情報＝英米文学作品のテキストファイル集（著作権などに触れないもののみに限らせていただきます。申込み制、有料—— 郵送料こみで¥1,000）現在数百の作品数を保有しています。
- ・パソコンの研究への応用に関する質問コーナー
- ・その他

エニグマBBSは佐藤治夫先生の研究室に設置した NEC PC-9801ES5 を使用したシステムで、平成3年から運用していたものを、英米文化学会会員にも開放して頂いたものです。

パーソナルコンピュータ、ワープロ（通信が可能な機種のみ）にて接続すると、数字で選ぶメニューが表示されるので、半角の英数字などで選択することになります。その外に、電話回線との接続のための、モデムの購入が必要となります。

付随する機能としては、BBSの会員あてにメール (electronic mails) を出すことができます。接続したときに本人あてにメールが来ていると「メールが来ています」と表示されメールボックスからメールを読みだすことができます。メールは受取る本人以外は読みだせないシステムとなっておりますのでプライバシーも安全であると思います。

参加希望者は、佐藤治夫先生の研究室 (03-3219-8160) まで直接申込んでください。申込んだ会員には利用者IDとパスワードが発行されて利用できるようになります。多数の会員の参加をお待ちします。

2. 会員の動き

(1) 住所等の変更（住所の前の数字は郵便番号です）

(2) 新入会員**3. 会員による出版**

勝浦吉雄・訳 マーク・トウェイン『ミシシッピ河上の生活』 文化書房博文社 2,900円(平成5年3月30日発行)

分科会活動状況等報告

(1) 下記の通り分科会が開催されますのでお知らせいたします。

第一分科会：5月29日(土)

第二分科会：5月29日(土)

(分科会理事 五味田)

(2) 第三分科会

去る5月8日に、当分科会のメンバー5名が集まり、第5回目の会合を開きました。各自がその後の研究の進捗状況を報告し、研究テーマを確認した後、今秋、原稿の形にまとめられるような方向にもっていきたいというところまで話が進みました。

なお、4月より当分科会の代表が門野に変わりましたのでお知らせいたします。(門野)

(3) 第五分科会発足のお知らせ

4月24日、新たに第五分科会の設置を希望する会員が集って、それぞれの専門分野の紹介を行なってから、大島先生より提供された資料を利用しつつ新分科会の研究テーマについて検討しました。統一的なテーマの決定をみるには至りませんでした。5月下旬に再度会合を開きその際に会の研究テーマを決め、本格的な活動に入る予定です。大島先生には当分科会の顧問をお引き受けしていただけることになりました。

第一回目にご出席されたのは、五味田、石山、古澤、佐藤、高取、日高、山下、渡辺の各先生、それに小河原でした。また、有馬先生も当分科会に参加される見込みです。なお、代表は、小河原がお引き受けすることになりました。以上、報告いたします。(小河原)

編集委員会より

『英米文化』の原稿締め切りは10月末日です。お早目をお願いいたします。



大石五雄 監修『ニューアンカー英作文辞典』*The New Anchor Junior Writer's Dictionary*

(学研出版、1993、960頁、2,100円)

英文の和訳と日本語の英訳とは全く異なる学習過程であるので、和訳をする時には「英和辞典」を使い、英訳には「和英辞典」を利用することが当然と思われる。ところが本書は、その常識を打ち破るかのように、和英辞典ではあるが約450ほどの英語の「基本文型」、例えばその一例を引用すると「AをBに応用する apply A to B」とか「物(A)を(B)と交換する exchange A for B. 物(C)人(D)とを交換する exchange C with D. Cが数えられる名詞なら複数形(236)」というような形で載せて、できる限り英和辞典の特質を合わせ持たせようとしている辞典である。だから、英作文の勉強をしている高校生や受験生が、日本語の対訳である英語が解ってもその英語の使い方(文型)が解らずにさらに英和辞典を引き直すという悲劇が、本書を使う限りなくなるであろう。そして、文型が解らないために英語の語順が目茶苦茶である英文を書く生徒には、文型の重要性を認識させてくれる辞典でもある。ともかく、「文型」をわかりやすく提示していることが、まさに本書の最大の長所と言えよう。

本書の「まえがき」で「英作文とは英語を用いて口頭や作文で自己表現をすることである」と定義しているが、しかしなかなか英作文では自己表現ができないものである。それは、まさに日英(米)文化の差異にすべての原因があると言える。出題された日本語を英訳する際に、この日本語の表現はこういう状況の下で使用されるというような解釈を行ない、さらに日本語の各語にも同様な解釈を行なう。そして日本語に対応している語法を持つ英語を、和英辞典で探す。したがって、和英辞典は利用者のその検索を十分に満足させるかどうか和英辞典の優劣を判断する基準になると言えよう。

ところで、本書は文化の問題についてはどうであろうか。本書は、日英(米)文化の差異を「参考」という項目で、たとえばその一例を引用すると、「何のお構いもしませんで」に当たる英語はない。We hope you can come again. (またぜひお越しください) などのように言えばよい。(93)」というように説明している。また、長方形の色刷りの「解説」という項目では、例えばその一例を引用すると「difficultは困難を克服するのに技術・工夫・知識などが必要な難しさを指し、hardは肉体的に大変な、あるいは精神的にきつい、を表わす。difficultのほうが深刻で少し改まった響きのあるのに対して、hardはより口語的だが多義のため漠然としている。くだけた言い方ではtoughも使われる。(806)」というように詳細に基本単語が持つ文化的背景を解説している。本書は、そうした「参考」「解説」を本文の中に挿入させることによって「事典」の性質をも兼ね備えている辞典になっている。確かに「参考」「解説」を拾い読みするだけでも、かなりの英語力が身につく。その意味では、本書は、英語に対して興味を常に持っている、やる気のある高校生や受験生に一番利用してほしい辞典であると言えよう。

本書は、日英(米)文化の差異を「参考」と「解説」でカバーしているが、日本語と英語(米語)との語法上の差異、例えば日本語では「水」も「錠剤」もどちらも「飲む」と書くが、英語では前者をdrinkで後者をtakeで表わすような事柄についてはどうであろうか。この点については、初歩的な常用語については「基本訳語」という項目をわざわざ作り、日英(米)の表現の違いを提示している。「基本訳語」の一例として「かく」の項をみると、「文字・数字を書く write、線画・図形をかく draw、絵の具で塗る paint (132)」というように解説している。この「基本訳語」は一目でさまざまな用語法が解る点が良い。そして「基本訳語」に従って、1(文字を)write、2(絵を)draw(線描する); paint(彩色する)という項目に分け、それぞれの項目にかなり実用的な例文を多く掲載している。それらの例文も生徒が英作文を作る時にかなり参考になる文でもある。当然のことだが、「かく」の同音意義語である「角」、「核」、「欠く」、「掻く」、「各」のそれぞれの項に訳語や例文が付されている。そして各訳語がすばやく見つかるように2色刷りの工夫がされている。また本書に収録されている語数は1万5000語である。こうした諸点を考慮すると、本書は高校生、受験生に最適の辞典であると言えよう。最後になってしまったが、岩田一男編の『アンカー英作文辞典』(1970)を、本会会員の大石五雄先生の監修の下に、「英作文」というユニークな前書のタイトルをそのまま使用してはいるがその内容を全面的に改訂された新作とも言える辞典である。好評ではあったが前書を改訂させたのは、発行後20余年経た

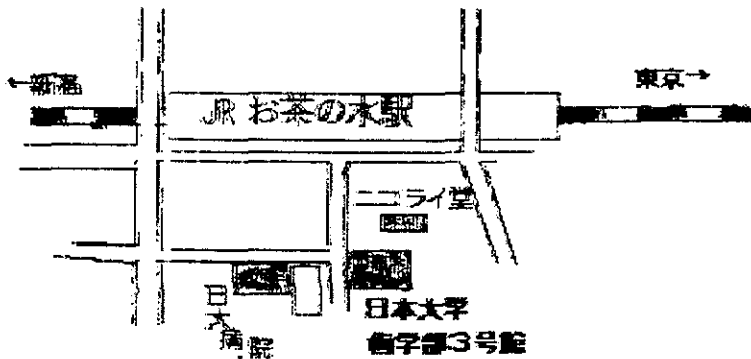
事と辞典の内容を急激な日本の国際化の時代に即応させたいという編集方針によるものであった。そうした方針の下に、本書は、高校初級から受験生までの英作文の学習の他に、大学生や社会人の英会話にも役立つようにと欲張って編集されている。だからその編集方針や前述した内容からいっても、本書は高校生や受験生また英会話を勉強している大学生にぜひ薦めたい辞典である。(小林 弘)

学会費納入についてのお願い

4年度までの会費が未納の場合には、お手数ですが早目に学会の口座の方へ振込方お願いします。なお、この度、英米文化学会の口座が下記のように変更になりましたので学会費(年3,000円)等は新しい口座へお振込下さい。銀行または郵便局のどちらの口座でも結構です。

1. 銀行口座 あさひ銀行毛呂山(もろやま)支店
普通預金 口座番号: 3505809
口座名義: 英米文化学会
2. 郵便振替 振替口座番号: 東京 6-611777
口座名義: 英米文化学会 (お問い合わせ等は会計担当理事の石川先生までお願いします。)

第82回例会会場(日大歯学部3号館)



訂正とお詫び

英米文化学会会報の前の号(5年2月20日発行)の番号は誤りでしたので以下のように訂正しお詫び申し上げます

誤	正
#0012	#0014

編集・発行: 英米文化学会編集委員会=池田 広子、小川 喜正、岸山 睦、武井 朗子、中村 豪、宮崎 敬子、
山根 正弘

発行責任者: 〒 中村 豪

※お断わり: 本年4月、学会役員・委員等の変更がございましたが、学会の従来の封筒に残りがありますので、旧封筒を使用しました。悪しからずご了承下さい。